

玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第 61 回

同時代から見た頭山満

一書と人物一

今年四月、五二年ぶりに教育勅語の原本が発見されたことが報じられました。原本には「御名御璽」、つまり明治天皇ご自身の署名（睦仁）と印（印面は「天皇御璽」）があります。「御名御璽」のある、歴史史料としても貴重な原本を紛失したというのも変な話ですが、発見場所は「東京国立博物館にある文科省の保管庫」だそうです（朝日新聞デジタル）。どんな事情があるにせよ、いいかげんな管理が行われたことは間違いないところです。

教育勅語の初めの方に「我が臣民、克く忠に、克く孝に、億兆心を一にして」という文があります（「カナ」を「かな」にし濁点を付しました）。この「億兆心を一にす」を漢文に直すと「億兆一心」となります。この四文字を書いた、頭山満の扁額（石瀧蔵）

は連載の第五九回（一一七号）で紹介しました。億兆は数の大きいことを言いますが、転じて人民、万民を指すということですが、「億兆」は単なる万民というのではなく、「我が臣民」を言い換えたものと解すべきでしょう。

頭山満の、額や軸に書かれた文字には一々典拠があることは疑いありません。しかも筆を手に、「墨場必携」のような本から有名な詩句を引いたというのではなく、意味のある言葉が日頃から頭に蓄えられていたことでしょう。紙に向かうと躊躇なく筆を揮ったと言われます。

近代史の研究仲間である廣畑研二さんが自分の家（栗須七郎旧邸）に頭山の額があると教えてくれました（写真1）。廣畑さんはその由来を存じないので、栗須七郎をめぐる縁



であつたことは間違いないと思われまふ。栗須（一八八二〜一九五〇）は和歌山県出身で、大正十一年（一九二二）の全国水平社創立当時から部落解放運動に加わっています。廣畑さんは「水平の行者 栗須七郎」という研究書を公にしています。頭山の接点は見えてこないそうです。栗須のもとに頭山の額があつたとすれば、目の前で直接揮毫してもらつたにちがいありません。というのも、そこに書かれている言葉がそれを指し示していません。この文字は読めそうでも、まさしく頭山満独自の書風なので、これも研究仲間の寺崎幹洋さんから読んでくれました。右から左に読んで「義励」で「義」は点が二つ見えます。[義]は点が二つ見えますが、画数を略し点にしてしまふのは頭山の書によく見かけます。何より「満」の署名がそうなっています。「励」の書き様は珍しい形ですが、「力」が下に潜り込んだと考えればいい下しています。

でしよう。松と委、崎と寄のようなものです。寺崎さんの教示によると、「魏志」楊阜伝による例があり、「以義相助」（義を以て相助ます）が一つ。「呉子」[四国]では「凡制国治軍、必教之以礼、励之以義、使有恥也」（凡そ国を制し軍を治めるには、必ず之を教えるに礼を以てし、之を励ますに義を以てし、恥有らしむる也）とあるのがもう一つです。いずれも「義を以て励ます」です。ここから「義励」を引いたのは確かでしょう。差別と闘う人を頭山満が励ましている：と私は受け止めました。

偶然に重なるもの。頭山満が「行義達道」と書いた板額が新潟県新発田市長徳寺「義士堂」に納められていて、新潟日報の森澤真理さんが教えてくれました。写真3は長谷川真弓さんが所蔵されているもの。すなわち、あわせて政治家・軍人らが天井絵を寄進したものだそうです。新発田市は堀部安兵衛の出身地です。天井絵一枚はおよそ五〇センチ四方で、五七枚が飾られていました。昨年大倉喜八郎ら三人の書を加えて、計六〇枚にする計画があると報じられました。四十七士の木像は大正二年、福岡にあった桃中軒雲右衛門の屋敷から移されたといふことです。国立国会図書館が所蔵



し、著作権が切れていると見なされた図書がデジタルデータとしてインターネットで閲覧できます。国会図書館のホームページ「近代デジタルライブラリー」では現在三五万点が自宅のパソコンで閲覧可能となっています。ここで「頭山満題字」と検索すると一三点がヒットしました。内一点は重複で、残り二点は大正十三年（一九二四）〜昭和十九年（一九四四）の範囲に収まります。福岡県で発行された雑誌類にはしばしば頭山満の色紙が収録されているので、これからもっと集めることができるでしょう。前号で述べたことですが、頭山満の書には年号や年齢が記載されていないため、書風の変遷をたどったり、真贋の見極めに困難がありました。発行年がわかる図書・雑誌類は頭山の書の変遷をたどる上で参考になるはずですが、写真4は『日韓合邦秘史』上巻（一九三〇）に収録された「日月無偏照」の書。

典拠は「礼記（らいぎ）」にある孔子の言葉「日月無私照」のようです。太陽も月も地上にあるものを公平に照らすという意味。これを「無偏照」と置き換えたことになりましたが（「日月は偏りなく照らす」と読ませるカ）、おそらく「日韓合邦」（日本と朝鮮が対等に合併する）の書名に合わせて、「偏り」がない、という語感を重んじたのでしよう。もちろん現実の韓国併合は日本が韓国（朝鮮）を呑み込んだのであり、合邦の理想は裏切られたのでした。



勝海舟に「天地育生無偏私 日月照物自至公」で始まる詩があります。この七字二行は頭山満が揮毫することがあり、私は後者を持つています（写真5）。読みは「天地生を育むに偏私なく、日月物を照らすに自ずから公に至る」でしょうか。

※廣畑研二様、寺崎幹洋様、長谷川真弓様、森澤真理様に感謝します。